

ヒューマン・リバーの小舟

野口津義夫

芸術的卍の世界

振一郎と啓介は土手に上った瞬間、言い知れぬ感動の虜になった。薄明るい天空と、土手と川を挟む河川敷の闇との対照が、二人を超自然的な世界へと誘った。

ヒューマン・リバーの小舟

まえがき

東京都幸福区——。読書の秋。一人の女子高生が、小高い丘の上にある風変わりな図書館にやって来た。人生にとって、あるいは人間にとって必要と思われる本しか置いていない、この図書館を目ざして、人々は早朝から続々とやって来た。開館時間は、火曜日から金曜日までは午前五時から午後九時まで、そして土曜日と日曜日は午前五時から午後七時までと、一般の図書館より長かった。あまりの人気に大慌てした区は、この春から急遽、職員の数を増やし、開館時間を大幅に延長したのだった。

早くから哲学に親しんでいるヨーロッパと違い、高校で哲学の時間のない日本に困惑して、文人や識者達が秘密の会議を重ね、一風変わった図書館の建設を企図したのだ。

この日も、時間が経つにつれて、丘の四方の下方から、人々が蟻のように群れをなして上って来た。

「はい、どうぞ。これで、あなたは登録されたわ」

明るい、品のある中年女性がやって来て、少女に図書館利用カードを差し出して、微笑んできた。

「ありがとう」

思わぬ素敵な女性の出現に、少女は頬をピンク色に染めて答えた。

「それで、お嬢さん、今日は、どんな本がご希望なの？」

年齢や趣味や将来の夢などの記載された少女のカルテを見ながら、その受付のエレガントな女性が尋ねた。

「わたし、日本の色んな時代の文化や慣習や世相などに興味があるの。そして、それらを通じて、世の中の有様、人情、風情を汲み取って、人間の生活上の様々なしきたり、行事を勉強し、その時その場に属した人達の、人間としての喜怒哀楽に迫ってみたいの」

「難しいわね。きつと、あなたは社会学科向きね」

十六歳の、かわいらしい少女の殊勝な発言に、その受付の女性は感心して言った。

「そうかしら・・・」

一年生の彼女には、よく分からなかった。

「お嬢さんは、大学は、どんな学部に入りたいの？」

「文学部です」

「でも、文学部といっても、今のあなたの言葉から察すると、文化史とか社会現象とかに関心があるようだから、国文科向きじゃないし・・・。小説は、あまり好きじゃないのね？」

「あら、そんなことないわ。自分の志望とは別に、休みの日なんかは、結構、小説を読むのよ」

「そうなの。じゃあ、どうしましょうか。今日のお目当ては、どのジャンルかしら？」

「あのう、父や母から聞いたんですけど、昔、新宿通りで、日曜ごとに前衛劇をやってたそうね。

また、横浜の山下公園でも日曜ごとにロックンローラー達が集まって、踊って歌ってエンターテインナーぶりを発揮してたそうね」

「ええ、知ってるわ。でも、それは、かなり最近のことよ。最近って言っても、昭和四十九年頃と昭和五十五年頃だったから、勿論あなたは知らないわね」

「わたし、まだ生まれてないわ」
そう言って、少女は笑った。

「わたしの記憶からして、ポニーテールがはやったのは、昭和三十年だから、わたしも知らないわ。次の年の太陽族も知らないわ。でも、フラフープぐらいになると知ってるのよ。三十三年でしょう」

「じゃあ、みゆき族（三十九年）やミニスカート（四十一年）は？」

「その頃になると、もう十分知ってるわ」

受付のエレガントな女性の、「十分」という強調された言い様に、つい、おかしくなって少女が吹き出した。

「あまり喋ると年齢がバレそうね」

苦笑して女性が言った。

「ごめんなさい」

と謝りながら、少女は、無意識のうちに自分の母親と比較していた。

「でも、随分詳しいわね。感心したわ」

そう言って、女性は少女のミニスカートをチラッと見た。少女は、思わず、恥ずかしそうにして膝頭を付け、その上に両手を置いてスカートの裾を気にした。

「流行は繰り返すのよ……。分かったわ、そういう本をご希望ね」

「はい。でも、今日は小説を読みたいの——」

一瞬、女性は戸惑ったが、ニコツと笑って、パソコンに検索条件を入力してサーチした。

「お嬢さん、任せて——。あなたに、ぴったりの小説を今持って来るわ」

そう言って、女性は席をはずした。そして『ヒューマン・リバーの小舟』(1987.10)と題された奇怪な小説を少女に持って来た。

帰宅した少女は、胸をときめかせて早速読み始めた。

序

広木夫人は、ぽかぽかとした春の陽気にのせられたのか、娘の監視の手を緩めた。早咲きの名所、熱海梅園を筆頭に、各地の梅情報が新聞を賑わす二月中旬の、ある日のことであった。百合子は二階の自分の部屋で、オーブンレンジを使った料理の本をめくっていた。

彼女の家には、まだ十分使える電子レンジがあったが、父と母との手によつて、すべてを閉ざされてしまった彼女は、オーブンレンジの購入を激しく両親にねだった。この半ば、やけ気味の彼女の態度は、単なるお嬢さん育ちの我がままと呼ぶには程遠い、遺恨を含んだ報復であった。彼女は正当な理由を行使して、広木夫人を説得した。

「お母さん、どんなにお料理の上手な人でも、これからはオーブンレンジを使ったお料理ができません。駄目なのよ。だから、それはそれで学ぶ必要があるわ。お隣の恵子さんだって、駅前のレストランの電気屋さんで、定期的に開かれてる講習会に通ってるのよ」

百合子は料理を作っている時、心が一番和んだ。最初は捨て鉢で始めたレンジ料理も、今では結構楽しく、ただ温めるだけだった電子レンジに代わって、彼女の料理の幅を広げていった。焼きリンゴ、アップルパイ、食パン、ロールパン、ピザ、それにグラタンなどが彼女の得意とするものであったが、勿論、ピザの台もグラタンのホワイトソースなども、一切、彼女が自分で作った。

百合子は料理の本を閉じた。まだ午前中なのに、外の暖かさが窓から伝わってきて、コタツの

暖など要らないくらいであった。彼女は横になつて目を閉じた。五年前の楽しかった日々のが、脳裏に蘇った。

六月の葉山――。海開きも間近い大浜海岸の浜辺に、百合子の淡いピンク色のTシャツが鮮やかだった。

「もう、すっかり夏ね」

彼女の足下に繰り返して打ち寄せる小波の白い飛沫が、腰からじわじわと伝わってくる砂の熱さを、アイスクリームのような爽やかさで包んだ。

「うん。もう、みんな泳いでるね」

風で時折なびいて触れる百合子の長い髪を、心地よく頬に感じながら啓介は言った。御用邸のある海辺には、まだ、そんなに人はいなかったが、マリンスポーツを楽しむ若者達が結構いて、二人の目を楽ませてもらえた。

「先生も、あんな波乗り、やってみたら――」

百合子は、おどけて言った。

「まさか。僕にはできないよ」

「そんなことないわ。先生がやれば、わたしもやるわ」

啓介は百合子の水着姿を想像した。きつと、かわいいだろうと思ひ、彼女の肩に腕を回して自分に引き寄せた。すると、滑らかな体の感触を通して、初々しい百合子の息づかいが伝わってき

た。十六歳もの年の差に申し訳ないと思う彼の気持ちだが、逆に死にたくなるほど百合子を欲し、彼は教職者としては失格な、愛の冒険から逃れられない自分を恐ろしく感じた。

「この前、失敗したんだよ」

「何を？」

「二月の十日頃だったかなあ。僕は、あちこち歩くのが好きだろう。カメラを持って越生に行っただ。そしたら、梅の奴、まだ咲いてないんだよ」

「それは残念でした」

「池上の本門寺とか、梅ヶ丘とか、東京だと、もっと早いだろう」

「あら、この辺は、もつともつと早いわよ。三溪園や瑞泉寺なんか——」

「君、色んな所に行ったことがあるんだね」

啓介は目を丸くして言った。

「お父さんやお母さんが、つれていってくれるの」

「へええ……。それでね、当然咲いていると思うって行ったのに、まったく駄目だったね。通りすがりの老人がね、三月上旬ですよって呆れ顔で言うんだよ。まいったね」

「せっかちだからよ、先生は」

そう言って、百合子はクスツと笑った。

「『先生』は、やめてくれ。電車の中では特にまずいね」

啓介は、しかめっ面をして言った。

続きは
完成版で
お楽しみ下さい。